



# 子どもとともに哲学を : 教科学習を深めるために

中川, 雅道

---

**(Citation)**

第61回兵庫県中学校国語教育研究大会 / 第56回兵庫県中学校書写教育研究大会:9-10

**(Issue Date)**

2021-11-16

**(Resource Type)**

conference paper

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008819>



# 子どもとともに哲学を

～教科学習を深めるために～

(提案者) 神戸大学附属中等教育学校 教諭 中川雅道

## 1. はじめに

ユネスコが推進している、子どものための哲学 philosophy for children (= p4c) の実践が世界各国で広がりを見せている。日本でも、企業、大学、高等学校、中学校、小学校、幼稚園、保育園、地域活動など、様々な場面で実践されている。哲学には「難しい」というイメージが付きまとうが、哲学の始まりは、子どもたちが問いかける「なぜ」という素朴な感情であり、私たちの誰しもが持っているものである。世界を知りたい、世界を変えたいという希望を実現するやり方として、哲学は人類の長い歴史の中で生み出されてきた。p4cは、世界を知り、変革していく実践であると捉えることができる。

漢文もまた、生活から遠い文化として避けられる傾向がある。しかし、漢文は広範な分野を含み、豊かな教育資源を秘めている。「訓読ができる」ことだけに注力せず、豊かな教育資源にアクセスし、身近な物事を考えるヒントとして活用することで、新たな学びの可能性をひらくことができる<sup>1</sup>。

このようにして教科内容の学び方として哲学のあり方を考えた場合に、哲学はすべての学問の礎であったという経緯のために、教科内容を問わずに実践できるという強みがある。すべての教科の内容を深めるための共通領域、各教科をつなぐ「廊下」として活用できる可能性として、哲学を捉えなおすことができるだろう。

## 2. 取り組み

これまでの取り組みの経験から、p4cにこれから取り組む場合に必要な知識と、他の領域で実践する場合の示唆を提案したい。

### (1) 問いを立てる

どのような問いが選ばれるのかは大切であるが、問いについて考えたいという子どもたちの意欲がより大切である。「勉強は才能なのか？」といった身近で考えさせられる問いによる対話を経験すると、初めは問いが出せなかった人も、次第に考えてみたい問いが作れるようになる。

### (2) 輪になって座る。

向かい合って話すことができるように、机をどけて椅子で輪になって座る。私たちが話す時には、身振り手振りを交えて、視線を交錯させながら話すため、全員が向かい合って話せる場所の方が話し合いを展開させやすい。

### (3) 糸玉のコミュニティボール (ソフトボール、ぬいぐるみでも代用できる) を使う。

コミュニティボールには、話す権利、招待する権利、パスする権利という三つの役割がある。ボールを持っている人が話すことができる。他の人たちはボールの方を見て、聞くことに集中できる。話し終わって、誰も手をあげていない時には、ボールを投げて他の人を探求に招待することができる。

<sup>1</sup> 本提案は、日本学術会議科学研究費助成事業、基盤研究(C)「哲学資源としての漢文教材および学び方の開発に関する基礎的研究」(20K02730)の研究の一環として行われたものである。

る。話すことを強制されるわけではないので、ボールを渡されてもパスすることができる。探求はすぐには育まれない。焦らずに、ゆっくりと考えることを強調しておく、安心してその場にいることができる。

#### (4) セーフティを守って、話し合う。

話し合いのセーフティは「互いへの敬意がある限りで、どんな発言でも、どんな質問でもできる」と表現される。安心して話すことのできる環境は、一度作られたらずっと存在するような性質のものではなく、話し合いをするたびごとに、いつも新たに安心できる場所を作ろうと意識することがとても大切である。子どもたちが慣れないうちは、毎回確認した方がよい。

#### (5) 最後に振り返りを行って、話し合いを終える。

「安心して話せましたか?」「よく考えましたか?」などの質問に、全員手をあげて振り返ってもらう。低く手をあげたら「あまりできなかった」。高く手をあげたら「とてもできた」といったように話し合いを振り返って終わる。それらを書くことのできるワークシートを準備しておく、評価の際に活用することができる。結論を出すことよりも、考えを振り返ることを目指す。

#### (6) 教員の在り方

その場に参加する教員も、一人の参加者として、話し合いに参加する方がうまくいく場合が多い。もちろん、教室の学習環境には配慮を行うが、教員が絶対の答えを知っている、子どもたちより優れているというように権威的に振る舞うと話し合いが萎縮してしまうことが多い。

各教科で積み重ねられてきた教材研究の最後に、話し合う機会として、問いを立てて話し合うプロセスを組み込むというイメージで単元を構成することができる。

#### (7) 他の教科内容との関わり（以下は過去の実践例なので、他教科でも応用可能）

##### ①「特別の教科 道徳」

道徳の教科書に掲載されている読み物資料から問いを立てて話し合う。一つの内容項目にとどまらずに、様々な観点から読み物資料を活用することができる。例えば「我、ここに生きる」（東京書籍）を読み、「なぜ私たちは働くのか?」について考える、など。

##### ②社会

歴史の特定の分野を学んだ最後に「歴史を学ぶ必要は本当にあるのか?」という問いで対話を行うなど、個別に学んだことが教科学習の目標に叶っていたのかを反省できる。地理、公民分野でも可能。

##### ④美術

対話型鑑賞の方法として活用できる。美術作品を中心に置いて、作品について問いを立てて話し合う。実際に子どもたちが作成した抽象画やオブジェなど様々な作品に応用できる。

### 3. おわりに

哲学をすること、考えることは、私たちは日頃から行っている。しかし、教室の中で子どもたちに知識を授ける教員として仕事をしている時には、根源的なことを考える哲学の活動に参加することは難しい場合もある。様々な研究会の機会や、各学校への出張授業の機会を活用して、多くの方々にやり方や魅力を伝え、子どもたちとともに探求する可能性を伝えていきたい。